危機意識を研ぎ澄まし大災害を生き残る(1)

（矢作征三、巨大災害に立ち向かうニッポン、東京、社会評論社、2015、p.41-50）

2017 年 5 月 13 日、災害医学抄読会 http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

災害時、人はなぜ逃げ遅れるのか。その原因の 1 つに“正常性バイアス”というものがある。これは、社会心理学、災害心理学で使用されている心理学用語で、多少の異常事態が起こっても、それを正常の範囲内としてとらえ、人の心の平静を保とうとする動きのことを指す。人間が日々の生活を送る中で生じる様々な変化や新しい出来事に対し、心が過剰に反応し疲弊しないようにするために必要な働きで、自己防衛の本能的な作用である。しかし、この本能の働きが災害発生時に人が避難行動に移るときの妨げとなることがある。この心的仕組みは、異常時に「過剰な行動」は起こさず「過少に行動」するよう人間に生まれつき備わっているものであるという。人間は災害に襲われるとパニックにはならないが、心身が「凍り付き症候群」に陥り、思考・行動が停止してしまい、心身が麻痺状態、呆然自失状態になり、危険から逃げ遅れることに繋がる。動物が危険から生き延びるために擬死（死んだふり）するのと同じ本能的な行動であると言われている。

3 つの具体例を挙げる。1 つめは、1977 年 3 月 27 日にスペインのテネリフェ島ロス・ロデオス空港の滑走路上で、パンナム機と KLM 機の 747 ジャンボ機同士が衝突炎上した事件だ。パンナム機には大勢の生存者がいた。しかし、多くの乗客・乗務員が逃げ遅れた。KLM 機の死者 248 人、生存者なし、パンナム機の死者 335、生存者 61 人であった。パンナム機内の生存者は正常性バイアスによって「凍り付き症候群」に陥っていたと推測された。

2 つめは、2003 年 2 月 1 日に韓国大邱市の地下鉄で起こった放火事件だ。多くの乗客が煙の充満してきた車内で静かに座ったままの姿勢でいたことで、死者 196 人、負傷者 147 人という被害にあった。ここでも正常性バイアスによって、「非常時だ、逃げろ！」という危険に対する防衛本能にスイッチが入らない状態になっていたのではないか。他の人が逃げないので自分も逃げない、無意識に大丈夫だ、と自分に言い聞かせていたのではないだろうか。同じ状況でも、人数が増えるにつれて逃げ出す時間が徐々に長引き、遅くなるというのも正常性バイアスの特徴である。

そして 3 つめは、東日本大震災だ。警報や自治体の避難勧告にもかかわらず、大地震の直後に住民は避難を開始しなかった。地震の大きな揺れが鎮静化し、その後大津波が襲ってくるまでには 30～40 分の時間差があり、避難する時間はあった。にもかかわらず避難行動をとらない人が大勢おり、わざわざ海岸の堤防のすぐ側まで出かけ、海面の状況をカメラに収めようとする人もいた。犠牲者の多くは自分がパニックに陥るのを無意識に抑える正常性バイアスが働いていることを知らずに自分の命を危険に晒してしまったのだ。

このように、急いで逃げる・危険を回避する、など急いで非難すべき非常時に、人は無意識で急激な行動を抑える反応が備わっているという現実を理解する必要がある。また、町の消防、警察、行政機関の職員に甘えすぎず、巨大自然災害の脅威を現実視することも重要である。逃げ遅れを防ぎ、助かるべき命を落とさないために、人々には災害に対する意識を向上させ、自分の状況に合わせた避難方法を自主的に考える臨機応変な行動が求められるのだ。